校長室だより～燦燦～ №６７

魔法の言葉

2020.2.25

先日の福島県国際理解教育研究会の懇親会の際に、ある先生から声をかけられた。「失礼ですが、〇〇中学校のテニス部の顧問の先生ですよね。私、テニスコートで何度かお会いしているんです」

少しお話して、すぐに状況が理解できた。その先生は私の娘が中学生のときに、いわき市のある中学校のソフトテニス部の顧問をなさっていた方だった。その中学校のことはよく覚えている。体格がよく、オーソドックスなテニスをしている選手がいた。スケールが大きく将来伸びるであろうテニスをしていた。

〇〇中学校とは私の娘の学校である。そのとき、私はすでに部活動の顧問を引退しており、立場は一保護者だった。しかし、顧問の先生が都合のわるいときなどは、ベンチにも入って指導もしていた。だから、顧問の先生と思われても仕方がない。

その先生のお話はこうであった。あるとき、娘の学校とその先生の学校が、何かの研修大会で対戦したことがあった。ソフトテニスの団体戦は、２人組のダブルスを３対戦行って勝敗を決める。したがって、レギュラーは６人である。だが、登録メンバーは８人である。８人のうちから６人が試合に出ることになる。

県大会以上になると別だが、多くの大会や練習試合では、生徒が審判を行う。この大会でも生徒が審判をしていた。そうすると、団体の登録メンバーには入っているが試合には出ない、いわゆる４番手の選手が審判をすることが多い。そのときも、相手の学校の４番手の選手が審判をしていた。その選手の審判が実に見事であった。ベンチに入っていた私は、試合が終わってからその選手に声をかけ、その審判ぶりをほめた。こんなことをする指導者は滅多にいないであろう。実はきちんと審判ができる選手はそう多くはない。その選手は際立っていた。私は本当にすばらしかったので本気でほめた。このことは私の記憶にも残っていた。

その先生が、このことを話してくれたのである。私にほめられた選手は、うれしくて顧問の先生に報告してくれたそうである。その選手は、一生懸命努力しているが、なかなかレギュラーにはなれない。そのことで落ち込むこともあった。それでも、やるべきことはきちんとやる素直でまじめな生徒だった。顧問の先生もその生徒の努力を認め、いつも励ましていたそうである。

そんなときに私が絶妙のタイミングで彼女に声をかけたらしい。自分の努力が認めれたと思ってくれたのだろう。相手は、初めて会った見ず知らずの人なのだが。それも顧問の先生とみせかけてただの一保護者なのだが。

その後、彼女の人生は変わったそうである。このエピソードをもとに作文を書いたらコンクールで入賞したそうである。その先生は、当時、私に手紙をしたためようかと思ったそうである。話を聞いていると、その生徒もすごいが、私に熱く語ってくれるその先生も人柄がにじみ出ており、いい先生なのである。

私の一言が、一人の中学生の人生を変えていたとは、それまでつゆ知らずにいた。教員をやっていると、生徒の心に響く“魔法の言葉”が言えればと思うときがある。これがなかなかむずかしい。様々な条件がそろわないと同じ言葉を発したとしてもそうはならない。いったい、今まで何度魔法の言葉を発することができただろうか。言葉というものはむずかしい。人生が変わった生徒さんの明るい未来を楽しみにすると同時に、私に話してくださった先生にただただ感謝するばかりである。